

渤海国の武器について

方 學 鳳
吳 滿

1. はじめに——渤海国についての概観
2. 渤海国研究についての意義
3. 渤海国の武器についての研究目的
4. 武器が出土した遺跡地と遺物
5. 松樹郷永安遺跡地から出土した鉄鏃
6. 松樹郷永安遺跡地から出土した鉄刀
7. 渤海の武器
 - (1) 殺傷武器
 1. 長武器
 2. 短武器
 3. 射武器
 - a. 弓
 - b. 矢尻（鏃）
 - (2) 防御用武器
 1. 冑
 2. 頭盔（兜）
8. おわりに
9. 付録 絵図1～31

キーワード：松樹郷永安遺跡地、殺傷武器；
弓・矢尻（鏃）、防御用武器；
冑・頭盔（兜）

1. はじめに——渤海国についての概観

本稿の執筆に先立ち渤海国についての概観を記すことにする。まず、紀元668年に高句麗が滅亡した後、その地域（遼東）には多くの高句麗遺民たちが約10年間に亘り唐に抵抗しながら

再起の機会を企てていた。一方、唐は高句麗が滅亡した後、10余万名を生け捕り営州に集結し、当地を異民族の統率地としていた。高句麗の宝蔵王（642-668）を遼東の頭目とし親唐的な小高句麗国を樹立したこともあった。これは、高句麗遺民に対する無慈悲な移民政策であった。

この時、営州にあった契丹が反乱を起こし小高句麗国を占領した。そこで、7世紀末、高句麗遺民の指導者である大祚榮（698-719、高王）將軍はその勢力を追い払い、その群衆と靺鞨族の一部を率いて往地の東牟山（吉林省敦化に所在）を根拠地として698年に建国した。これがまさに朝鮮史の連綿たる脈を継いできた正統国家の渤海国であった。この渤海国は初め国号を「震」と定め、年号を「天統」と称した。こうして南方の新羅と北方の渤海がともに存在した「南北国時代」が開かれたのである。

元来、渤海は親高句麗的な性格を帯びて出発した国であったため、広い地域で高句麗精神を継承、維持させようと努めた。そして当初は唐に抗したが、後にはしだいに唐と交流を持ちはじめた。しかし、新羅とは終始一貫、敵対関係を堅持した。新羅も渤海に対しては同様であった。

大祚榮は乞々仲象の子息として、唐とは敵対感情を抱き連続的な抵抗の生き様を固守した。

それが結局、高句麗継承と渤海国建設へと具体化したと言えよう。大祚榮は渤海を建国した後、北進政策で驚異を与えていた突厥族と協力して対唐牽制勢力を堅く構築していった。その後、大祚榮は息子の大文芸を唐に入侍させたことを契機にして平和を継続させることができた。渤海が唐の制度などに影響を受け、文物を発展しえたのはそのためであった。713年（天統15）、唐から渤海君主を封じて国号を「渤海」と改めた後、高句麗の往地をほぼ修復し、「海東の盛国」を樹立した。

次に、渤海の文化について略述しておく。

渤海の始祖大祚榮が21年間に亘り基盤を築いたのに引き続き、2代目の武王（719-737）と3代目の文王（737-793）の当代に至り国土が拡張され文化が発達したし、721年には東北境に城を築いたりした。また、首都を中京から上京へ移動したのも国内の支配体制の整備と発展のための拠点、都市確保策であった。

渤海の全盛期と称される9世紀初めの10代宣王（818-830）の御代から5京、16部の地方制度を完備した。版国は東北方に沿海州を過ぎて黒龍江、松花江に至り、西方へは鴨緑江下流から、開元、農安の西側に通じ契丹と遼東に接し、南方へは大同江、元山湾にまで拡がり新羅と接していた。しかし、かようにも強盛であった渤海も10世紀初め、東蒙古に根拠を持つ遊牧民族の契丹の族長耶律阿保機が中国を占領せんがため攻撃して後は国力が衰えはじめた。あたかも14代目の瑋瑋王（901-926）の御代、契丹の奇襲を受け上京龍泉府が陥落し、14代、228年ぶりに滅亡した。紀元926年のことであった。

渤海の各種の制度は唐を模倣した。中央には世襲の王のもとに3省6府制があったし、地方は5京15部62州で分割、統治した。その外、中央に属した特別官庁としては中正台（監察）、

文籍院（図書編纂・保管）、司賓寺（外交）、胄子監（教育）などがあり、王を補佐した。官吏は8等級に分かれ、指導層は高句麗の貴族が多く占有した。軍制は、10位を設置し、国民皆兵制を原則とする、強力で秩序ある常備兵約10万を確保した。

一方、渤海は日本と文物を交流することによって産業を隆盛させ、模倣による創造的な新しい文化を完成させていった。文化の制度は高句麗の遺民である貴族たちによって5京を中心に仏教的色彩を帯びながら発達した。その中でも8世紀末の三代文王の御代に上京東京城に遷し、永く政治、文化の中心地をなして最も繁栄、発達した。最近発見された遺跡によれば、首都の上京には周囲4里ほどに達する土城があったが、これは内城と外城から構成されており、中央には朱雀大路を中心に秩序整然な市街地が区画整理されていたし、現在もそこには王宮を始めとして石階段、石燈、瓦、石煉瓦のようなものが多く出土している。これは渤海国の繁栄を物語るものである。また、これら美術と工芸品の共通的な特色は高句麗の影響を受け、大陸的であり進取的である野生美が見られる反面、渤海的な特有の素朴な趣も漂わせている。墳墓は横穴式の高句麗の系統である。

渤海は高句麗の往地である東三省地方で興起したが、永く朝鮮史上疎外されていた。三国を統一した新羅は、渤海を高句麗遺民だと称して渤海初期に少し交流があったのみで、靺鞨族が大部分だという二元的組織観念で同胞意識が欠如し融和できなかった。しかし、渤海の建国者と支配層は高句麗文化を受け入れたのみならず10世紀初に渤海が滅亡した後、高句麗系統の人々は高麗に入り朝鮮民族の再統一を促進させる底力を形成した。こうして遺民である烈萬華は鴨緑江畔に安定国を建てた。

2. 渤海国研究についての意義

ところで、日本と渤海との関係史において重要なことは、日本の奈良時代から平安時代にかけての200年間、渤海から日本に派遣された、所謂、「渤海使」が30回を超えて往来したこと、また「送渤海使」は15回に上ったという事実である。しかし、現行の日本の世界史や日本の教科書の記述には渤海国の名は登場してもせいぜい数行の記述でしかない。これは、渤海国の歴史や文化に関した記録が消失し、殆ど伝えられていないことによる。渤海国の滅亡についても未だに学問的な証明が成されていない実状である。

他方、朝鮮が日本の植民地統治下にあった時代に、日野開三郎を代表とする日本史学家によって渤海国に関した研究がなされたが、それは日本の大陸侵略と植民地政策の一環としての研究姿勢であったことを否定できない。かような状況の下、日本でも戦後の永い期間、渤海国についての研究が不振であったが、1990年に入り日・中・韓と北朝鮮による渤海国についての研究が活発化した。日本でも最近10年の間に6種の専門書が発刊されたし、韓国でも1988年の韓・中国間の国交正常化以来、史学者の現地調査や共同研究がなされている。

渤海の研究が近年、脚光を浴びはじめた背景には、ロシア・中国・北朝鮮・韓国の4国が渤海国の旧領土地域についての経済的・歴史的観点から関心を注いでいるところにあると言えよう。一方、筆者（呉）が在職している大阪経済法科大学でも1991年に「東アジアの社会と経済」という課題の下、国際学術シンポジウムを開催し、第3部会（歴史）にて「東アジアにおける考古学・歴史学の現状—渤海史研究—」にて内

外の研究者による活発な研究成果が発表された。

筆者（呉）は幸いにも二度に亘る中国・延辺朝鮮族自治州への訪問を経て、三度目（1994年8月1ヶ月間）には姉妹校協定を締結している延辺大学校付設「渤海史研究所」所長方學鳳教授の案内と援助を受け、渤海諸遺跡を詳細に踏査する機会を持った。その後、その成果は学界に発表した（『東アジア研究』第15号所収「渤海の二四塊石遺址について」1997年2月、および『Korea Today』1995年1月号・2月号参照）。

国語学と言語学の研究に関心を払ってきた筆者（呉）が渤海国の考古学分野に関心を抱き始めた背景には方學鳳教授の支援と指導が多であった。本論文も方教授の貴重な最新の資料提供を土台として筆者（呉）が整理し、作成したものである。従って、本稿に関する内容については方・呉の共同研究の成果である。

21世紀を目前にした昨今、本格的な環東海交流時代が到来する趨勢にある。現実的には渤海船の基地であった豆満江（中国では圖們江）周辺の開発が北朝鮮を中心とした関連国家の熱い関心が注がれている。今まで渤海国についての研究は歴史学や考古学に偏向したきらいがあったが、将来的には文学・言語・思想・芸術・地理・地質・気候・環境などの分野でも十分に接近できる価値ある研究領域だと思われる。

3. 渤海国の武器についての研究目的

渤海国の武器についての問題は、史学界においても永い間に亘り関心が注がれてきた重要な問題の中の一つである。しかし、今日まで考古発掘資料が少なく文献資料が殆どない状況のため、渤海国の武器について学術的に記述した編著が殆どない。ゆえに渤海国の武器についての研究は、渤海史の研究上、極めて重要な意義が

あると言えよう。

本稿は、文献資料と考古学資料を根拠にして、渤海国の武器について考察を進めようとするのが目的である。資料不足と水準の制限で不十分な点が多いと思われる。学界諸氏の助言が得られれば幸甚である。

4. 武器が出土した遺跡地と遺物

これまでの考古学上の発掘調査資料によれば、渤海の武器出土遺跡地とその遺物についての状況は次のとおりである。

2)「城山子山城」は、吉林省敦化市賢儒鎮城山子村に位置している。この山城は敦化市から西南方向へ25里離れた処にある傲東城から30里離れた牡丹江上流の大きな支流である大石河南岸からはずれた高い山にあり、山頂は海拔600mである。地域住民の話によれば、城内から鉄製の矛頭、鉄刀、鉄鏃などが出土したが、現在それらがどこへ行ったか知る術がない。⁽¹⁾

2)「通溝岭山城」は、敦化市官地鎮老虎洞村の東方の山上に位置している。この遺跡地から鉄鏃が出土した。⁽²⁾

3)「傲東城」は、敦化市内の東南方の部位で、牡丹江北岸に位置しており、この遺跡地から鉄製の鏃が出土した。⁽³⁾

4)「鳳照水文站遺址」は、和龍縣龍門郷の所在地から西北へ10里離れた鳳照水文站の住宅区域付近にある。この遺跡地から鉄製の鏃1個が出土した。⁽⁴⁾

5)「北大墓群」は、和龍縣八家子鎮南村の

北方にある。この遺跡地から整形鉄鏃、帯鋌鉄刀が出土した。⁽⁵⁾

6)「青龍墓群」は、和龍縣龍門郷青龍村から西北へ7里離れたところにある。この遺跡地から鉄製の箭頭1個が出土したが、ひどく錆びついていた。⁽⁶⁾

7)「恵章墓葬」は、和龍縣勇化郷恵章三隊から西方へ2里離れた豆満江の支流である高岭河北岸の山麓にある。この遺跡地から鉄刀と鉄鏃が出土した。⁽⁷⁾

8)「古城里古城」は、和龍縣崇善郷古城里から両方へ1里離れた豆満江と紅旗河が合流するハブスモク西方の台地にある。この遺跡地から鉄製の鏃が出土した。⁽⁸⁾

9)「楊木頂子山頂」は、和龍縣龍水郷石国水庫から東南へ10里のところにある。この遺跡地から三角状の鉄鏃1個が出土した。⁽⁹⁾

10)「松月山城」は、和龍縣富興郷松月村から西南へ約2里離れた山上にある。この遺跡地からいくつかの鉄鏃が発見されたが、その形状は三角形に柳葉形の形態を帯びていた。⁽¹⁰⁾

11)「貞孝公主墓」は、和龍縣龍水郷龍海村龍頭山に位置している。貞孝公主墓の壁画に弓、弓囊、箭、箭囊、弓鏃、劍、鉄槌、兜などが描かれている。⁽¹¹⁾

12)「龍岩墓群」は龍井縣德新郷龍岩村から西南方向へ300m程のところにある。この遺跡地から鉄鏃が発見され、1979年の「文物檔案」に記載されている。⁽¹²⁾

13)「英城古墓」は、龍井縣東盛郷英盛衛生所から北方10m離れたところにある。この遺跡

(1)「敦化市文物志」p.57

(2)前掲書、p.66

(3)前掲書、p.54、方學鳳主編「渤海史研究」p.142

(4)「和龍縣文物志」p.16

(5)前掲書、p.34、p.36

(6)前掲書、p.40

(7)前掲書、p.43および絵図20

(8)前掲書、p.56

(9)前掲書、p.61

(10)前掲書、p.63

(11)前掲書、p.76~78

(12)『龍井縣文物志』p.87

地から鉄槍刀1点が発見された。この鉄槍刀は完全な形態の長舌状を具えている。また、刀の部分は槍の一方の端に位置し弧形をなしており、本体部分は條带状をなし柄の部分には柄につながる所と腐った布紋の跡がある。また、刀の先は2個の鉄片が外に向かって広がった形態をなしている。鉄槍刀の長さは17.1cm、幅は2.4~3.0cm、厚みは0.3cmである。なお、この鉄槍刀は「英城古墓」内の遺骨の右側から出土した。⁽¹³⁾

14)「龍河村遺址」は、延吉市長白郷龍河村3、4隊の耕作地、市変電所の塀の内側と東南両側に位置している。この遺跡地から鉄製の鏃が多く出土した。これらの鏃は柳の木の葉の模様になっており、長さは15.3cmである。⁽¹⁴⁾

15)「奉陽北溝遺址」は、安圖縣長興郷奉陽6隊から北へ1里の処にある。この遺跡から鉄箭頭が発見された。⁽¹⁵⁾

16)「五峰参場遺址」は、安圖縣長興郷五奉村から東へ10里離れたインサンジャン付近の西方の山麓にある。遺跡から鉄箭頭が発見された。⁽¹⁶⁾

17)「長明屯遺址」は、安圖縣長興郷羊砬子溝入口の南方の平台部にある。この遺跡から鉄箭頭が採集された。⁽¹⁷⁾

18)「大砬子山城」は、安圖縣明月鎮から東北方向へ長興河の下谷に沿い約10里行ったところにある。当地の住民によれば、旧満州国時代に当地で道を整地していたところ鉄鏃が発見されたという。⁽¹⁸⁾

19)「三道白河古城堡」は、安圖縣松江鎮三

道白河村から東方へ1里のところにある。住民たちの話によれば、殆どが当地で鉄鏃などの遺物を採集したという。⁽¹⁹⁾

20)「東京龍原府遺址」は、琿春市八連城に所在する。この遺跡から鉄刀が出土した。この鉄刀は弧形で、鉄刀の先の部分は尖っており、上向きである。また、刀先から柄のあるところまで入り込みながら次第に幅が広がりを見せている。刀刃は鋭利で広く刀剣の峰は比較的厚い。またこの柄は角張った形になっている。長さは66.6cm、刀刃の長さは53.8cm、刀刃の幅は0.5cm~5.5cm、刀刃の厚みは0.2cm~1.8cmである。刀刃と柄の接する部分の幅は1.8cmであり厚みは1.1cmである。ところで、渤海遺跡地から鉄製の刀剣が発見されるのは極めて少ない。この鉄刀は地中に千余年も埋まっていたものであるが、錆びた部分を剥がした後の形態は偶然にも鋭利で光沢がある。これは渤海国の製鉄技術が相当に高い水準であったことを推察させる。これまでの渤海考古学の資料に拠れば、渤海遺跡地から鉄刀が出土する現象は極めて珍しく、渤海国時代の武器を研究する際、とても貴重な資料と言える。⁽²⁰⁾

21)「上京城遺址」は、渤海時代の上京龍泉府遺跡地として、現在の黒竜江省寧安市渤海鎮上京城遺址に当たる。この遺跡地から鉄鏃、盔甲片、頭盔(冑)などが多く出土した。⁽²¹⁾

22)「三靈杖」は、黒竜江省寧安市三靈郷三靈村三靈杖に所在する。三靈杖は渤海王室貴族の共同墓地である。この三靈杖の区域内には数多くの墳墓が分布しているが、その中、第2号

(13)前掲書、p.92

(14)『延吉市文物志』p.41および図版7参照

(15)『安圖縣文物志』p.26

(16)前掲書、p.26

(17)前掲書、p.39

(18)前掲書、p.50

(19)前掲書、p.63

(20)『琿春縣文物志』p.86~87、および「渤海遺跡とそれに関する研究」p.337~p.338

(21)『渤海史経由地簡介』p.12および朱榮憲著『渤海文化』p.127~129および『朝鮮遺跡遺物図鑑』渤海編p.227~p.283

墳墓から鉄鏃が出土した。⁽²²⁾

23)「紅鱒漁廠」は、黒竜江省寧安市紅鱒漁廠にある。この遺跡地から多くの兵器が出土した。

24)「永安遺址」は、吉林省琿江市松樹郷永安村の西方の大苗地一帯にあり、この地域から鉄鏃、鉄刀、盔甲片などが出土した。この鉄鏃の先の部分は蛇頭のような形態をなしており矢尻の部分は短い。また、この鉄鏃の長さは12.8cmであり、幅は0.5cm、厚みは0.4cmである。

5. 松樹郷永安遺跡地から出土した鉄鏃

1984年7月から8月にかけて松樹郷永安遺跡地にて発掘事業が実施された時、鉄鏃が比較的多く発掘された。これらの鉄鏃は形態が多様である。今、それらの形態を次のごとく5種に分けて考察してみよう。

1. 最初の形態は、刀剣が弧形になっているが、刀刃が鈍く、鏃身は三角形であり、柄は方錘形である。また横断面は柳の木の状態である。長さは8.1cm、幅は1.5cm、柄の長さは3.6cmである。

2. 2番目の形態は、菱形で先端が尖っており、円形の柄が付いている。鏃身の横断面は菱形であり、柄には錆びた跡が残っている。長さは2.5cm、厚みは0.6cm、柄の長さは4.4cmである。この鏃は錆びた状態が極めて荒い。

3. 3番目の形態は、桂葉形のもので、鏃身の背後に短い柄がある。また、鏃身になだらかな曲線の背があり、その背の両側の鋭利な刃は甚だしく錆び付いているため、見た目にはその形態が判らない程である。長さは5.3cm、幅は

1.2cm、厚みは0.4cm、柄の長さは2.0cmである。

4. 4番目の形態は、鏃の頭の部分が毒蛇の頭のような形態をなし、鏃の先の部分は三角形をなし、中程に幾分なだらかな曲線の背がある。この背は柄の部分と接続している。長さは5.1cm、柄の部分は3.7cm、柄の幅は0.3cmである。

5. 5番目の形態は、鏃身が狭く、長い錐のような形をしているものである。現在残っているものの長さは15.0cm、幅0.7cm、厚みは0.5cm、柄の長さは5.0cmである。

上述したこれらの鏃は靺鞨人が狩猟と戦闘によく使用した武器であった。歴史上、靺鞨人は勇猛でよく闘ったと伝えられているが、上述したような武器は、靺鞨人がこれらを使用した実上の証拠となる。

6. 松樹郷永安遺跡地から出土した鉄刀

1984年8月、琿江市松樹郷永安遺跡地から鉄刀が多く発掘された。この鉄刀の大部分はかなり錆びていた。今、それらを3種に分けて説明しよう。

1. 最初の種類は鴨の形態のもので、刃とその背が全て平坦に作られており、刃の先が上にそりあがっている。その残りの部分の長さは13.7cm、幅は2.0cm、厚みは0.2cmである。

2. 2番目の種類は刀身が細くて長く、また刀身の背は平坦で刃が弧形になっている。柄の近くがかなり広い形をしている。それに刀の柄の上には、いまだに木柄が腐食し錆びた跡が残っている。残りの長さは17.0cm、幅1.6cm、厚みは0.3cm、柄の長さが5.4cmである。⁽²³⁾

(22)『中国文物報』1992年1月刊、第1版参照

(23)『琿春市文物志』p.16、p.78~80、p.131~133、p.135 ↗

3. 3番目の種類は、刀身が平坦で、刀刃も平坦をなして刀の先は少し上にそりがあっており、刀の柄は比較的細い。長さは11.1cm、幅1.3cm、厚みは0.3cm、柄の長さは3.0cmである。

25)「西高家遺址」は、琿江市四道溝郷三合城村西高家屯にある。この遺跡地から鉄鏃、鉄刀などが出土した。⁽²⁴⁾

26)「臨江鎮遺址」は琿江市臨江鎮にある。この遺跡地から鉄弓鏃と鉄刀および矛などが出土した。

1959年、臨江鎮臥龍山西坡建国小学校付近から比較的多くの鉄鏃が発見され、現在吉林省博物館に保管されている。この鉄鏃を総合して分類すれば、次のような6種の形態に分類することができる。

1. 最初の形態は「鏃形鏃」、すなわち鏃の形態の鏃で、鏃の刃の部分が丸く弧円形をなし、鏃身と柄が接続する部分は六角菱形である。長さは10.0cm～11.5cm、刃の幅は2.8cm～3.4cmである。

2. 2番目の形態は、鏃の形態をなしており、刃と刀身の幅が殆ど同じであり刃の先の部分と似ている。長さ15.2cm、刀の幅は0.9cm、厚みは0.3cm、柄の長さは4.8cmである。

3. 3番目の形態は、燕尾のような形のもので、三叉形鏃とも称する。刃の部分は燕尾形で曲線をなし、その後に四角形の柄が続き大きさは比較的小さい。長さ5.5cm～5.9cm、刀の幅2.2cm～3.2cm、柄の長さ3.2cm～3.8cmである。

4. 4番目の形態は、尖った菱形鏃で、鏃身は細くて長く、横断面は菱形である。刃の部分は尖っており鋭利で、背の右側に一筋の血槽があり、その後ろは方鏃形になっている。長さ17.

5～18cm、幅0.8～0.9cm、厚み0.5cm、柄の長さ4.9～5.7cmである。

5. 5番目の形態は、刃の部分が弧形で刀身が括れたもので、鏃刃部分が斧の刃のように平たく広くて弧形をなしている。また、刃と柄との間は細く長い。また刃の部分の後ろには左右に二つの翼が付いたようになっており、翼の後に柄がある。長さは12.5cm、刃の幅3.4cm、刃尾の幅2.6cm、柄の長さ4.3cmである。

6. 6番目の形態は、鏃の先が毒蛇の頭のような形をしており、その左右両側に鉤が逆さまに付いたものである。長さ14.0cm、柄の長さ6.3cm、幅2.8cmである。

以上の状況を造形面から考察すれば、高句麗時期に使用された銅類器物と類似した点が非常に多いと言えよう。しかし、渤海時期のものは高句麗時期の鏃に比べ製造はるかに精密で実用的であり、極めて美観的だと言えよう。⁽²⁵⁾

27)「臨城城址」は琿江市臨江鎮臨城八隊にある。遺跡地から鏃形の鏃形箭鏃が出土した。⁽²⁶⁾

28)「新安城址」は、撫松縣新安古城にある。この遺跡地から鏃が出土した。⁽²⁷⁾ この鏃は菱形で先が尖っており、尾の部分が長く弱い。また、中間部分が広く曲線の背がある。鏃の形態はいろいろであるが、一般的にその長さは各々7.8cm、7.9cm、12cmであり、幅は各々3.2cm、1.3cm、鏃の長さは各々1.3cm、2.2cm、2.8cmであることが多い。

1985年、ある農民が新安旧城の東方の城外で家屋を建てようと基礎工事をしていたところ、鉄製の鏃二束を発見した。また、この中の一束

参考

(24)前掲書、p.23

(25)前掲書、p.24～27、p.77～78

(26)前掲書、p.37

(27)方學鳳著『渤海遺跡とそれに関する研究』p.337および『撫松縣文物志』p.41

には鉄鏃が20個ずつ入っていた。

29)「六道溝銅礦遺址」は、琿江市六道溝郷の銅江銅礦采礦区にある。この遺跡地から鉄鏃が出土した。⁽²⁸⁾

30)「テーヨンウ遺跡地」でも鉄鏃が発見された。⁽²⁹⁾

31)「蘇密城」を「大城子」とも称する。この「蘇密城」は樺甸縣樺甸鎮大城子村にある。この遺跡地から鉄鏃が出土した。⁽³⁰⁾

32)「康石墓郡」は、柳河縣太平川郷康石屯の西方の果樹園にある。この遺跡地から鉄刀、鉄矛、鉄鏃、甲片、馬具などが発掘された。鉄矛は本体が長く柳葉形をなし全てに穴がある。鉄刀は全てその背がまっすぐで、刃は弧形である。また、ある鉄刀の柄には木製の柄の痕跡が残っていることから判断して、当時の矛の柄は全て木製であることが分かる。鉄鏃は数量が多いのみならず様式も多様である。また、形態上、菱形鏃、正三角形、長三角形、三翼後鋒菱形鏃、燕尾形などがある。そして、墳墓ごとその内部の副葬品の中にはおよそ兵器が内蔵されていることから推測して、当時は戦闘が極めて頻繁であったことが推測できる。⁽³¹⁾

33)「揚屯大海猛第三期文化墓帯」は、延吉縣揚屯大海猛遺跡地にある。この遺跡地から鉄矛、鉄刀、鉄鏃などが発掘された。⁽³²⁾

34)「六頂山古墳群」は、敦化市六頂山の渤海墓区域にある。この遺跡地から鉄鏃が出土した。⁽³³⁾

35)「青海土城遺址」は、半島以北の咸境北道北青郡荷湖里にある。この遺跡地から鉄鏃、

鉄刀、鉄矛、甲片などが出土した。⁽³⁴⁾

36) 半島以北の咸境南道咸州郡から鉄刀が出土した。⁽³⁵⁾

37) 半島以北の咸興市会上区域徳山洞から鉄刀が出土した。⁽³⁶⁾

38) 梧梅里寺洞遺址から冑が発見された。⁽³⁷⁾

39)「帽児山山頂遺址」は、延吉市龍井へ抜ける帽児山の頂にある。この遺跡地から鉄鏃が出土した。⁽³⁸⁾

以上、記述したとおり、渤海の武器の出土状況を整理してみると、武器は主に、中京顯徳府、東京龍原府、上京龍泉府、西京鴨緑府、南京南海府など五京を中心とした地域内から多く出土したことが分かる。また、これまでの考古学調査の結果に拠れば、旧国地域内から四カ所、中京顯徳府管轄区域から十八カ所、東京龍原府管轄区域から一カ所、上京龍泉府管轄区域から三カ所、西京鴨緑府管轄区域から七カ所、南京南海府管轄区域から四カ所、その他の地域から三カ所、渤海時期の武器が出土したことになる。

これを再び今日の地域範囲で分けてみると、敦化市区域内から四カ所、和龍縣内から八カ所、龍井縣内から二カ所、延吉市内から二カ所、図們市内から一カ所、安国縣内から五カ所、琿春市から一カ所、渤海鎮とその付近から三カ所、琿江市から六ヶ所、樺甸縣内から一カ所、柳河縣内から一カ所、永吉縣内から一カ所、咸境南・北道内から四カ所、合計四十カ所から渤海時期の武器が出土したことになる。これら四十カ所から出土した武器は客観的に存在する実物資料

(28)『琿江市文物志』p.53およびp.77

(29)方學鳳著、前掲書、p.337

(30)『樺甸縣文物志』p.47

(31)『永吉縣文物志』p.75～76

(32)前掲書、p.75～76

(33)『朝鮮遺跡遺物図鑑』p.277

(34)前掲書、p.278、p.280、p.283

(35)前掲書、p.280

(36)前掲書、p.280

(37)前掲書、p.282

(38)『永吉縣文物志』図版9 参照

として渤海武器と軍事問題を研究するに際して極めて貴重な歴史資料となる。

ところで、以上の四十カ所の遺跡地において、黒水靺鞨と接戦した地域、新羅と国境を接した辺境軍事要塞地、契丹と辺境をともしする地域の軍事要塞地に武器の散財しているところが多いものと推察されるが、未だに発見できないでいる。特に、渤海後期に至り、渤海と契丹との関係ははなはだ緊張関係にあり相互に熾烈な衝突が永く続いた。

『旧五代史』の「契丹傳」に、「阿保機はその群を率いて渤海の遼東を討伐した」と記録しているし、『契丹国志』巻十には、「東京、遼陽は即ち渤海の旧領土である。阿保機から数えて20余年間、努めて抗争してはじめて得たもので、これを東京と称した」と記している。また『遼史』の「天祚起二」には、「東京は渤海の旧土である。太祖は20余年間、努めて闘いこれを得た」と記している。また、『遼東行部志』には「・・・五大国時期に至り契丹は渤海と数十年間血戦を繰り広げた末、遂に渤海を滅ぼすことができた。よって遼東の地は全て遼の国に入った。」と記している。以上の文献資料からみて、当時の遼東は渤海の勢力範囲にあったし、契丹は数十年の血戦を経て遂に渤海から遼東を奪ったことが分かるし、東京を奪うために長期間に亘り戦ったことが分かる。したがって、この地域に渤海の武器が多く散在しているものと推測されるが、考古学的にはまだ証明されてはいない。

契丹の阿保機は、紀元925年に大軍を率いて渤海に対し全面的な進撃を開始した。契丹軍はまず渤海の西部戦略要塞である扶余城、即ち今日の吉林省農安を包囲し、猛烈に攻撃した。これに扶余城内の渤海城内の渤海軍と人民は頑強に遼の侵入軍を防御するため頑強に戦った。結

局、扶余城は紀元926年正月に遼の軍事に占領されてしまった。

扶余城は渤海軍と遼軍事との間に熾烈な戦闘が繰り広げられた激戦地である。ゆえに当地にも渤海の武器が多く散在したものと推察されるが、未だに発掘および採集されたという発表、報告資料がない。

7. 渤海の武器

渤海の武器としては、殺傷武器と防御用武器の二種に大別できる。そのうち殺傷武器の比重が高く重要な位置を占めている。殺傷武器は戦闘の勝利を収めるのに重要な役割を果たすために、渤海は殺傷武器の製造と使用に格別な注意を注ぎ各種の殺傷武器を製造した。

(1) 殺傷武器

殺傷武器はその形態と性能にしたがい「長武器」、「短武器」、「射武器」の三種に分けられる。以下、それらについて詳述してみよう。

1. 長武器

長武器としては、矛、三枝槍などがある。矛は矛頭、矛柄、矛鐙からなるが、現在残存しているのは矛頭のみである。

渤海の矛頭が発見された遺跡地としては城山子山城、英城古墓、臨江鎮遺跡地、揚屯大海猛、第三期文化墳墓、青海土城遺址、上京など七カ所がある。上京から出土した矛は下部部分が朽ちてしまったものが一点知られている。これは柳葉のような形をしたものであるが、根本の部分が朽ちてしまっている。残存部分の長さ7.1cm、幅2.0cmである。

臨江鎮遺跡地から出土した矛は、矛柄がなく矛頭だけ残っている。また、この矛頭が一番先

の部分は鏃のように尖っており、そこから根元の部分に至るまでの幅が徐々に広がっている。また矛頭と根元に続く部分は傾斜をなしている。矛頭と矛の本体は前後に背を向け、左右両側は刀刃のように刃が鋭くなっている。また、根元の部分は矛頭とつながるところから後部に入り込みながらしだいに鈍くなっている。矛頭と根元の部分の長さの比は同じである。⁽³⁹⁾

矛柄には長いものと短いものの2種があり、短いものは歩兵が主に使い、長いものは主に奇兵が使用したものと思われる。

奇兵の人数については、資料が極めて少ないため正確な数字を割り出すには困難である。しかし、詳細に推測してみると、およその数字を求めることができる。

第三代文王の大欽茂の御代（大興20年、紀元756年秋、唐の平盧留後徐帰道が果穀都尉行柳城郡兼四府経略判官張元潤を渤海に派遣し言うには、「渤海から奇兵四万を動員し我々と共に安祿山を討とう」との要求を提起した。しかし、渤海は張元潤が来た内幕について疑心を抱き彼を拘留した。その年の末、徐帰道が唐朝に背き安祿山に帰附したという情報を聞き奇兵を遣ったが、徐帰道を助けなかった。この事実によって推理すれば、渤海は文王大欽茂統治時期に大体四万前後の奇兵を所有していたものと思われる。したがって約四万の奇兵が長い矛と刀を用いていたものと考えられる。

三枝槍は、鉄製で永安遺址の一カ所からのみ出土した。この三枝槍は先の部分と本体、根元の部分から構成されているが、先の部分の尖った三つの筋の長さは本体の長さと同様である。また、本体は円錐形で、前の部分から後方面にかけて幅がしだいに狭まっている。

2. 短武器

短武器としては刀、斧、鉄槌などがある。渤海の刀は上京、⁽⁴⁰⁾ 城子山山城、北大墓群、惠章墓、貞孝公主墓、東京龍原府遺址、即ち現在の琿春市に所在する八連城、永安遺址、西高家遺址、換言すれば、現在の琿江市四道溝郷三合城村西高家屯、揚屯大海猛遺址、青海土城遺址、咸南咸州郡、咸南咸興市檜上区德山洞など十二カ所の遺跡地から出土した。

これら十二カ所の遺跡地から出土した刀を総合してみると、次のようないくつかの形態があったことを知ることができる。

1) 第1の形態は、刀と根元からなるが、その前部分が朝鮮足袋のつま先の尖った部分のようになっている。また、刀と根元の間に斜線形の突き出たところがあり、その部分が最も広い。刃は一方にだけ立っており、刃の背は角張っている。上京遺跡地から出土した刀がまさにその代表的な実例である。

2) 2番目の形態は、刃の先が尖っており、刀身は長く後部にたわんでいる。東京龍原府遺跡地から出土した刀がまさにそうである。この刀は鉄製であるが、弧形で刃の先が尖り上に持ち上がっている。刃の先から柄のあるところまで入り込みながら少しずつ広がっており、刀刃は鋭利で刃の背は少し厚い。

3) 3番目の形態は、刃は弧形で刃の背は直線にして厚いものである。このような形態の刀は永安遺跡地から二点出土した。

4) 4番目の形態は、刀身が細くかつ長くて、刃の背は平らで刃は弧形である。また、柄に近い部分は広がっている。

5) 5番目の形態は、刃の背が直線で刃の先は尖っており、先から柄のある所まで入り込み

(39)『琿春市文物志』p.27および図14参照

(40)朱榮憲著『渤海文化』p.128～129

しだいに広がっている。

6) 6番目の形態は、長篠形のもので、刃の背は直線が長く先に尖っている外は刃全体が大体同じ広さである。また、刃と刃の背は対称をなしながら長くなっている。このような形態の刀は咸興市檜上区域、徳山洞遺址、恵章墓葬、永安遺址などから一点ずつ出土した。

7) 7番目の形態は、刃と刃の背が全て平らで、刀の先は少し上に持ち上がっている。

8) 8番目の形態は、刀身の部分と柄がそれに続く部分の突き出たところを直角にしたものと、斜線をなしたもの、「く」形をなしたものの三種の形態がある。「く」形の形態をなしたものは東京龍原府遺跡地から出土したのがその特徴である。

渤海の刀には、長さが長いものと短いものの二種があった。東京龍原遺跡地から出土した刀の長さは66.6cm、刀の長さは53.8cm、刃の幅は0.5cm～5.5cm、刀の背の厚みは0.2cm～1.8cmである。これとは異なり、永安遺跡地から出土したある刀の場合、長さが13.7cm、幅2.0cm、厚みは0.2cmである。

渤海の刀は全て鉄製であり銅製のものはない。これは渤海社会・経済の中でも製鉄業がかなり発展していたことを語ってくれる。

遺跡地から出土した刀の実物以外に、貞孝公主墳墓の壁画に描かれた剣もある。この貞孝公主墳墓の内道後部には塚に描かれた剣もある。この墳墓の内道の後部には塚との間を守護する武士2名が描かれているが、東方から西方に向き合っている。彼らは戦袍を身にまとい、左側の腰に剣を提げ左手で剣を持っている。⁽⁴¹⁾ また、西側の壁には、背丈が約1.13～1.17mの4名の人物が描かれている。そのうち1番目の人は、

右腰に剣を提げ右手で剣を持っている。そして剣を鞘に入れているために剣の先、剣身、剣の刃、剣の背の形態についてはよく分らない。

十二カ所の遺跡地から刀剣を発見したことは、多年間の渤海考古学の重大にして貴重な成果である。しかし、個々の部分を具体的に説明しえず、また遺物としての刀剣に関して図版で発表され得なかったために、刀剣の具体的な状況、即ち生活用上の刀なのか戦闘用の武器なのか判断しがたかった。本稿ではかかる状況を十分に考慮に入れて、これら刀剣を武器類として取り扱い、将来発表される状況いかにによって、刀剣を生活用道具と戦闘用武器に分類して考察してみよう、と思う。

渤海にも武器としての大きな斧があったと推察されるが、未だにその証拠を断定しうる科学的資料を得られないでいる。恵章墓葬から武器類とともに斧1点が出土したが、それは生産用斧であり戦争に用いられた武器ではないらしい。鉄槌についても遺跡地から発見されたものはない。ただし、貞孝公主墓の壁画に見えるのみである。貞孝公主墓の内道の背後に描かれている二人の武士は、右手で鉄槌を持ち肩に担いで、勇然と立ち警戒している姿をとっている。また、墓と墓との間の東方の壁に前述のごとく背丈1.13～1.7mの人物像が描かれており、1番目の人物像は形に鉄槌を担いでいる。西方の壁にも4体の人間像が描かれており、初めの像は左手で鉄槌を握り肩に担っている。

3. 射武器

射武器は、遠距離の殺傷武器に属する。射用武器の中には弓と散発弓（一度に多く矢を射る弓）などがあった。

(41) 延辺博物館編『延辺文物簡編』p.110～111

a. 弓

これまでの考古学発掘調査によれば、矢尻（鏃）は渤海文化遺跡地から比較的多く出土したが、弓が出土したことはない。したがって、渤海の軍人が使用した弓の形態と特徴を理解することはできない。しかし、貞孝公主墓の壁画に弓が描かれているものがあるので多少その糸が探れよう。貞孝公主墓内の西方の壁に四人の人物像が描かれており、そのうち最初の人は左側の腰に弓筒をさげている。また、北方の壁には左側の方に弓筒を、背には弓を担いでいる。東方の壁に描かれた人物も同様である。

一方、貞孝公主墓の壁画にある弓の背は黒色を帯びており、内側の部分は白色に塗られている。また、内側の部分は白色を基準色にして「く」形の図案が描かれている。弓弦は平らである。弓は弓筒に入られているが、その弓筒には図案または装飾画が見られる。図案は主に植物図案である。弓は弓体と弓弦からなる。また、弓体の両端を除いて弓体だけを見れば弧形になっている。弓体の中間部分に関しては、弓筒が弓の半分以上を塞いで見えないために判断しがたい。弓体の両端と弓弦は直線をなし、弓弦は弓体の両側の端の部分を巻き付けたままになっている。弓筒は弓を入れやすいように弓の前半形態を模して造られている。

b. 矢尻（鏃）

これまでの考古学調査によれば、武器が出土した遺跡地は合計40カ所である。そのうち、英城古墓から刀剣が出土したが、矢尻は発見されなかった。したがって、渤海時期の矢尻が出土した遺跡地は全部で39カ所である。

出土した矢尻（鏃）は全て鉄鏃である。銅鏃と鍍金された銅鏃は未だに発見されていない。

矢尻は出土した場所が多いのみならず、その

数量も比較的多い。

矢尻は鏃と矢柄（矢の本体）、矢尻根の三部分からなっている。矢尻根は横断面が方形である。矢柄の形態は多様であり、その大きさもそれぞれ異なる。鏃は矢柄と刃の形態にしたがい種々の形態に分けられる。これまで知られている渤海の鏃は刃と矢柄の形態にしたがい次のようないくつかに分けられる。

これまでの内容を大略、帰納してみると、平らなもの、尖ったもの、二翼がついたもの、二枝槍のような形態のもの、音の出る鏃などに分類することができよう。次にこれらを再び分析してみることにしよう。

最初の形態は、槍刀模様の鏃である。これに属する形態としては槍刀の部位が狭くなっているものと広がっているものとがある。鏃の本体、即ち矢柄の前方の背は立っており、その両方の刃も立っており、後方は柄のようになっている。また、その形態は細く長い槍の先を思い起こさせる。

2番目の形態は、狭く長い鑿^{のこ}の刃模様の鏃である。横断面は四角形で、先の部分に真っ直ぐ立った刃がある。鑿の刃模様の鏃は、上京、永安遺址、臨江津、龍河村遺址、新豊村遺址、青海土城址、八連城址、城子山山城などの遺跡地から出土した。一方、臨江津臥龍山西坡建国小学校の付近から出土した鑿刃模様の鏃は刃と鏃本体の幅が殆ど同じで、刃の部位は鑿刃のような形態をしている。長さ15.2cm、刃の部位の幅0.9cm、厚み0.3cm、根元の長さ4.8cmである。

3番目の形態は、扇模様の鏃である。これは刃の部分が弧形の斧の刃模様で、あたかも広げられた扇のようである。このような鏃には刃が丸いもの、直立のもの、矢柄に穴の開いたものなど多様である。

4番目の形態は、二枝槍刃のような形の鏃で

ある。鏃の矢柄が二枚に分かたれて二枚槍刃のような形の鏃である。これは上京龍泉府遺跡地から出土したもので、二枚の前の部分は刀刃のように刃が立っており、二枚の長さや矢柄の長さは同じである。また、根元の長さは二枚の長さの三倍前後である。

5番目の形態は、狭く長い錐のような形態の鏃である。このような鏃は上京臨江津遺跡地、龍河村遺跡地、永安遺跡地、青海土城遺跡地、八連城遺跡地の多くの地点から出土した。

1984年7月から8月にかけて、松樹郷の永安遺跡地から鉄鏃が多く出土したが、その中でも矢尻（鏃）の矢柄が狭く長い錐のような形態のものがある。これは矢柄の残りの部分の長さが10.5cm、幅は0.7cm、厚みは0.5cm、柄の幅が0.3cmである。

6番目の形態は、毒蛇の頭のような形態の矢尻である。大体、他のものに比較してとても短い。永安遺跡地から出土した毒蛇の頭のような形態の矢尻の端の部分は三角形の形をしており、中間に幾分ゆるやかな背がある。この背は柄の部分と連結している。長さ5.1cm、柄の長さ3.7cm、柄の幅0.3cmである。

7番目の形態は、三角形の形態の矢尻である。この形態の矢尻は柳河縣太平川郷康石墓群から数多く出土した。その中には正三角形の矢尻がある。

8番目の形態は、三角形の形態のもので、刃は直線であり、刃の部分の左右両端は切断したようになっている。このような矢尻が上京龍泉府遺跡地から出土した。

9番目の形態の矢尻は、刃と矢柄全体の形態が三角形であるが、根元の長さの二分の一にしかない小さなものである。このような矢尻は臨江津遺跡地から出土した。

10番目の形態は、菱形の形をした矢尻である。

このような形態の矢尻は永安遺跡地でも出土したように先が尖っており、それに円形の柄が付いている。また矢尻の横断面は菱形であり、柄には錆びた痕跡が残っている。長さ9.3cm、幅2.5cm、厚みは0.6cm、柄の長さ4.4cmである。臨江津臥龍山の西坡建国小学校遺跡地からも菱形の矢尻が多く出土した。先が尖っており鋭く長い。長さ17.5～18.0cm、幅0.8～0.9cm、厚み0.5cm、根元の長さ4.9cm～5.7cmである。

11番目の形態は、魚類の尻尾、あるいは燕の尻尾模様の矢尻である。このような形態の矢尻は刃の部分が窪み入り組んでおり、左右両方が尖っているのが特徴である。このような形態の矢尻は臨江津と永安、上京、龍河村、八連城、城子山山城などの遺跡地から出土した。このうち、臨江津で出土した魚類の尻尾の矢尻は曲線をなしており、矢柄後方に根元がつながり、その大きさは比較的小さい。長さ5.5cm～5.9cm、刃の幅2.2cm～3.2cm、矢柄の長さ3.2cm～3.8cmである。

12番目の形態は、柳の木の葉模様の矢尻である。特に康石墓群で出土した柳の木の葉模様の矢尻には全て穴がある。

13番目の形態は、刃の部分が弧形をなし、斧の刃の形をしており、刃の本体が括れているが、刃と柄の間は細く、その後方へは柄のあるところまで徐々にその幅が広がってまるで翼がついたようになっている。長さは12.5cm、刃の幅3.4cm、尻尾の幅2.6cm、柄の長さ4.3cmである。このような形態の矢尻は臨江津、臥龍山、西坡建国小学校でのみ発見された。

14番目の形態は、二櫂あるいは三櫂形の矢尻である。このような形態の矢尻は臨江津、臥龍山、西坡建国小学校遺跡地から発掘された。刃の部分は弧形であり、その後方へ左右両方に2つの翼のようなものが付いており、櫂のあると

ころから根元のあるところまでは細く長くて、その後方に根元がつながっている。特に、康石墓群では三櫛形の矢尻が多く出土した。

15番目の形態は、金^{かなぐわ}鍬の形態のものと音のする矢尻があった。音のする矢尻は矢柄の後部に音が出るように穴をあけ器物を付けたものである。これまで知られたものとしては、斧の刃のような形態、即ち扇状の矢尻に穴をあけたものが大多数である。このような矢尻は、上京龍泉府と恵章墓群から出土した。

また渤海の人々は弓矢を矢筒^{つぼやなぐい}に入れて肩に担っていた。渤海国第三代の文王（大欽茂）の4番目の王女（貞孝公主）の墳墓の壁画に描かれた矢筒（壺胡籛）を通じて当時の人々が携帯していたと見られる矢筒がどのようなものであったのかおよそ推察することができる。貞孝公主墳墓の両方の壁に描かれた最初の人、皮帯を締め、道袍^{おくみ}の衽をたくしあげ腰帯に挟んで左右の腰に弓筒を提げている。また、右方の腰には剣と弓矢袋を提げている。また、北方の壁には二人が描かれているが、西方の人は左側の肩に矢筒を荷負い、背には弓矢を担いでいる。一方、東方の人は左側の腰に矢筒を提げ、左側の肩には弓を担ぎ、弓矢筒には図案または装飾画が描かれてある。この図案は大部分が植物図案であり、動物図案は少数である。そして、矢筒は二種類であるが、その中の一つは丸い円錐形の矢筒である。この矢筒は底の部分と口の部分の直径が同じであり、口の一方側に紐を付けて担うようにしてある。他のもう一つは、底の部分が広く口の部分が狭く作られており、口の一方の側に装飾したものを付けて美感をかもししている。この矢筒には、頭を後ろによけながらすばやく走る鹿一頭が描かれている。これ以外に散發弓のような武器があったらと推察されるが、未だに考古学上の発見はない。これに

は将来の新しい成果が待たれる。

(2) 防御用武器

渤海の防御用武器としては、胄^{よろい}と頭盔（兜）がある。

1. 胄

渤海の各遺跡地から完全な胄が出土したことはなく、甲片（札甲片）だけが発見された。札甲とは、鉄で作られた数多く札の切れ端を並べて縫いつけて作った胄で、自己を保護する作用をする。札甲片は上京龍泉遺跡地、永安遺跡地、青海土城遺跡、梧梅里寺洞遺跡など四カ所から出土した。

出土した札甲片の形態は長方形であるが、角張った角を取り払った後、縁または真ん中に左右対称的に筋を合わせながら括りやすいように穴を2つずつあけてある。札甲片は胄につける位置にしたがい、その大きさと形態が少しずつ異なる。一番大きな札甲片は正方形の鉄板の上の部分の2つの角をなくして下の部分を半円形に整えてある。次の形態は、上記のものに比べて小さく下の部分がもっと広がっている。その次の形態は楕円形に近いものである。最後にもう一つ異なる形態は、長さ比べて幅が大きいものであるが、殆ど方形に近い。胄は貞孝公主墓の壁画にも描かれたものがある。墳墓の内道の後方には、墳墓との間の門を守護する二人の武士が描かれており、東方と西方で互に向き合っている。彼らは赤い房を付けた胄を被り、戦袍を着用している。また、襟を相互に合わせ整えては黒色の腰帯を巻き、赤い衣の縁には黒い穂の飾りをした鱗模様の胄を引っかけているし、左側の腰には剣を提げている。

2. 頭盔（兜）

頭盔は、いくつかの鉄板片を縫いつけて作ったものであるが、主に頭部を保護するのに使用された。頭盔は上京龍泉府遺跡地、吾梅里寺洞遺跡地の二カ所で出土した。上京龍泉府遺跡地で出土した頭盔は今日の黒龍江省寧安縣渤海鎮にある上京博物館と黒龍江省ハルビン博物館に所蔵されている。

ハルビン博物館に所蔵されている頭盔は上京近郊の墳墓と住居跡から出土したものである。⁽⁴²⁾そしてその形態はそれぞれ互いに似ている。その中、墳墓から出土したものを調べてみると、釘を打ち込み8枚の鉄板をつないで頭盔を造ったことが判る。また、頭盔の下桁には鉄で枠を作り付け足してある。そして^{つまみ}抓みは珠のような形をしている。

この外、上京龍泉府の南方城壁の東門跡から頭盔（兜）の抓み出土したことがある。この抓みは真ん中に穴のある平たい珠算の珠のようなものを3つ縦に重ねて付けたものである。また、この珠は上方に向かってしだいに細くなっている。珠の高さは3.0cmにすぎない。ところで、この珠の中には穴の穿ったものがあるところから見て、珠には他のなんらかの装飾を施した形跡が推量できる。⁽⁴³⁾吾梅里寺洞遺跡地から出土した頭盔はこの種の珠がなく、頭盔の下部周辺に鉄でタガ（箍）を作っている。⁽⁴⁴⁾頭盔は貞孝公主墓の壁画にも描かれたものがある。この墳墓の内道の後方に、墳墓間の門を守護する武人二人が立っているが、彼ら二人は赤い^{ふき}房を付けた頭盔を被り威風堂々と立っている。この外、盾のような防御用の武器があったものと推察されるが未だに出土していないので具体的な状況を把握できない。

8. おわりに

以上、本稿で論じた渤海国の実態調査によれば、次のような2つの特徴に分析することができる。

1 番目の特徴は、渤海の武器は全て鉄製の武器であるという点である。今日までの考古学上の発掘調査によれば、殺傷武器としての槍、刀剣、斧、三枚槍、鉄槌、弓、鏃などのようなものと、防御武器としての兜、冑など全ての武器は鉄製品であり、銅製のものは未だ発見されていないということである。そして、全ての武器が鉄製であるということは渤海の製鉄業と武器製造技術が相当に発達し、高度な水準に達していたことを物語っている。もし製鉄業が高い水準に発達していなかったならば、各種の武器を大量に鑄造することができなかったはずである。

文献資料によれば、製鉄生産地として「位城の鉄」⁽⁴⁵⁾は生産された有名な場所であった。渤海の他の製鉄生産区は広州であった。広州は渤海国の鉄利府の管轄下にあった一つの州であった。宋朝の使臣である王會の紀行文の中には、王會が遼の中京大定府を通り過ぎる途中、柳河館の西北方にて多くの渤海の製鉄匠人たちが製鉄作業所にて働いているのを見たとの記事が見えるし、「渤海国志長編」巻17所収「食貨考」にも渤海の人々が鉄を精錬するのに能熟であったとする記録が掲載されている。

製鉄業の発達と製鉄技術の発展は武器を大量生産しうる前提条件である。渤海国はまさにかような条件が完全に具備していたからこそ、全ての武器を鉄製で鑄造することができたと言える。

(42) 朱榮憲著『渤海文化』p.127

(43) 前掲書、p.127

(44) 『朝鮮遺跡遺物図鑑』p.282

(45) 『新唐書』『渤海傳』参照

2番目の特徴は、武器の数量と種類が多いという点である。殺傷武器や防御用武器に分かたず、その種類が多様であり数量も多い。鏃の形態だけにしても15種に達する。1985年、新安旧城の東方の城壁近辺で、ある農民が家を建てようと基礎造りをしていたところ、鉄製の鏃が発見されたが、一束には20個ずつの鏃が入っていたことが判明した。

以上、「渤海国の武器」について、現段階に

おける考古学上の調査と分析結果をまとめて報告した。末尾ながら今後の考古学上の進展と歴史学上の研究成果によって渤海国研究がますます発展し、未だに未解決の東北アジアにおける歴史研究及び周辺諸外国との交流史が解明されることを期待し、本稿を終えることとする。

9. 付録 絵図1～31

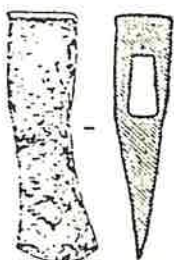


1. 刀

絵図1. 出所；北大墓葬の刀



1



2

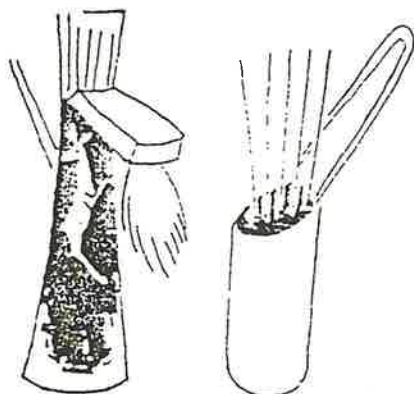


3

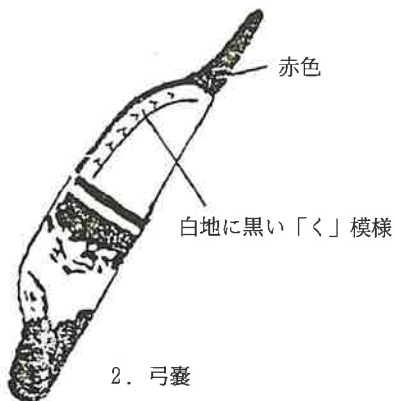


4

絵図2. 出所；恵章墓葬
①鉄刀 ②斧 ③・④鉄鏃



1. 箭囊

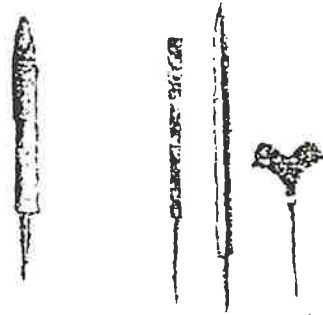


2. 弓囊

絵図3. 出所；貞孝公主墓葬壁画
①箭囊 ②弓囊



絵図4. 出所；貞孝公主墓壁画
①鉄槌



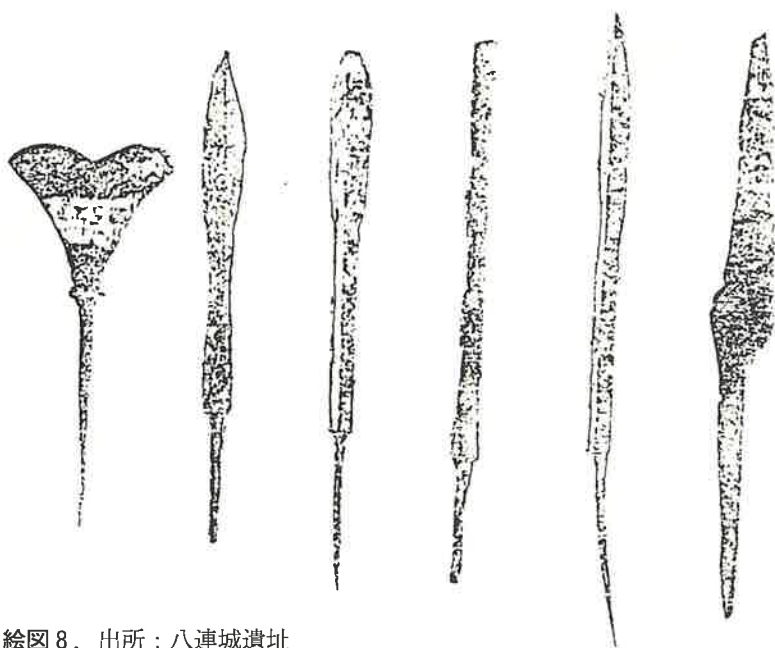
絵図5. 出所；龍河村遺址
①鉄鏃



絵図6. 出所；八連城遺址
①鉄刀

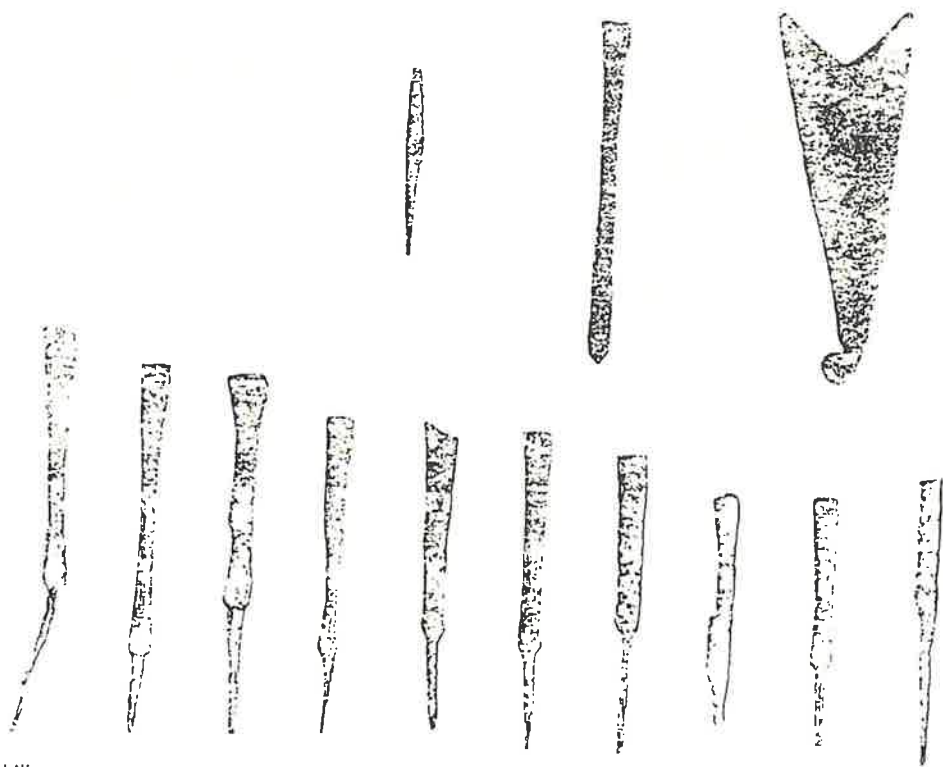


絵図7. 出所；新豊村遺址
①鉄鏃



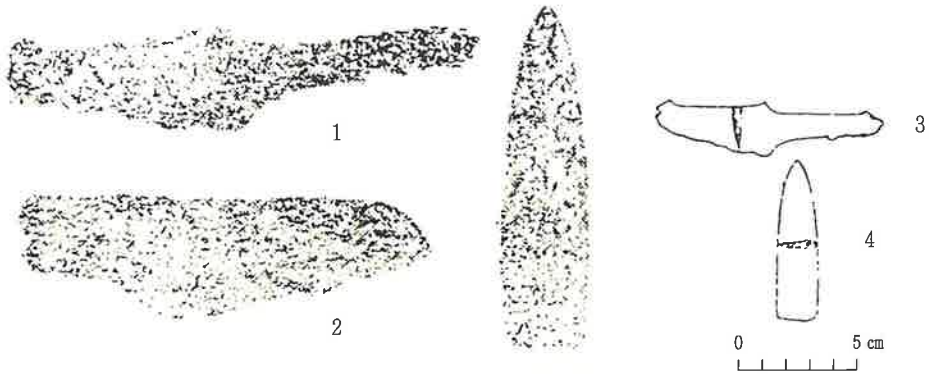
1. 鐵鏃

繪圖 8. 出所；八連城遺址
①鐵鏃

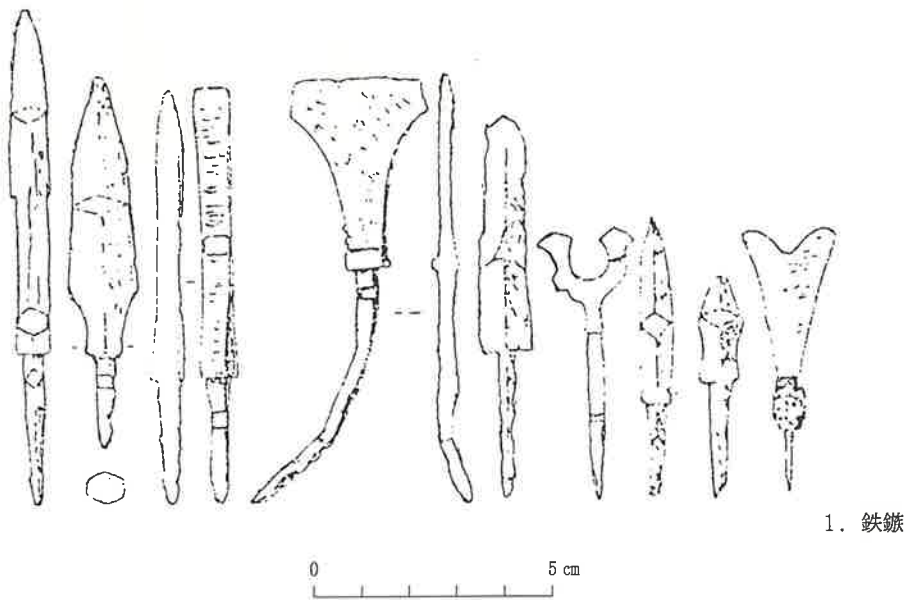


1. 鐵鏃

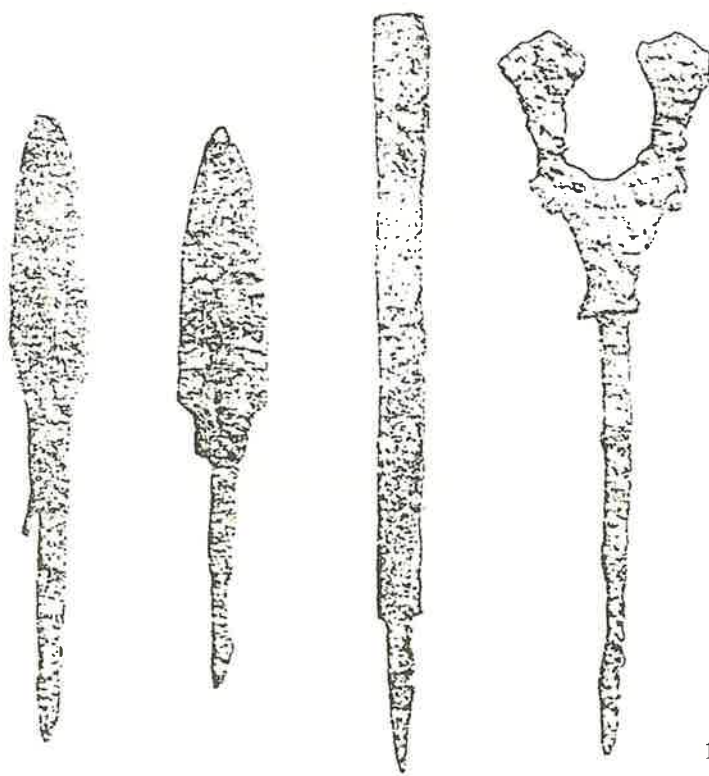
繪圖 9. 出所；城子山山城遺址
①鐵鏃



絵図10. 出所；上京龍泉府遺址
①・③鉄刀 ②・④矛頭

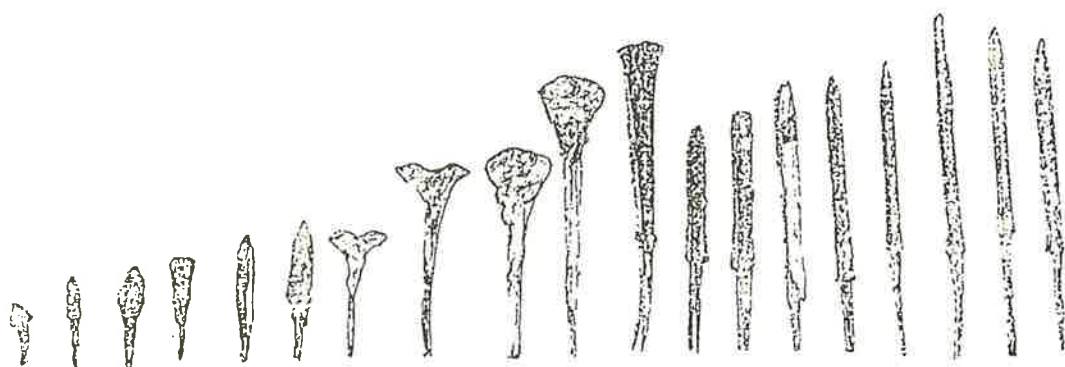


絵図11. 出所；上京龍泉府遺址
①鉄鏃



1. 鉄鏝

絵図12. 出所；上京龍泉府遺址
①鉄鏝



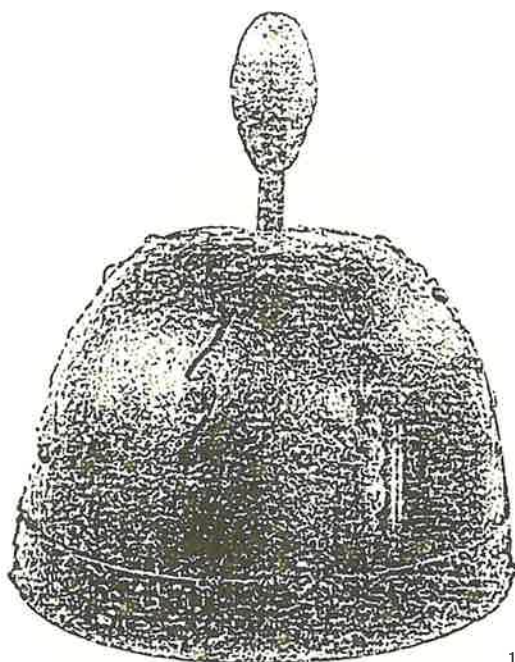
1. 鉄鏝

絵図13. 出所；上京龍泉府遺址
①鉄鏝（一番長いもので18.5cm）



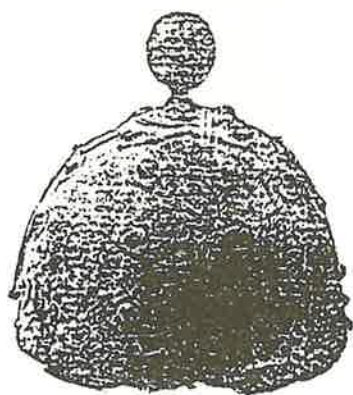
1. 頭盔

絵図14. 出所；上京龍泉府遺址
①頭盔（兜）（高さ16.7cm）



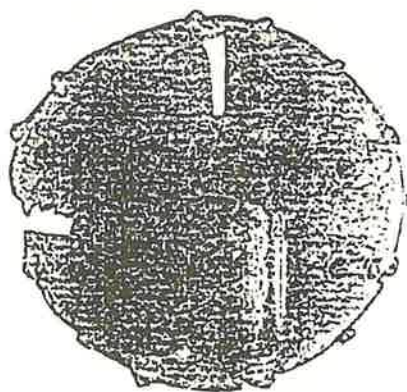
1. 頭盔

絵図15. 出所；上京龍泉府遺址
①頭盔（下部の直径は20.3cm）



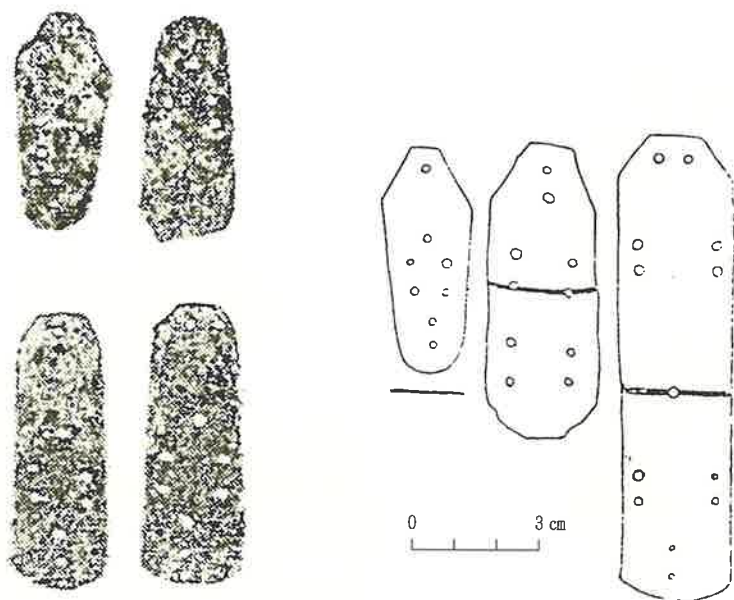
1. 頭盔の前面

絵図16. 出所；上京龍泉府遺址
（ハルビン博物館所蔵）
①頭盔の前面



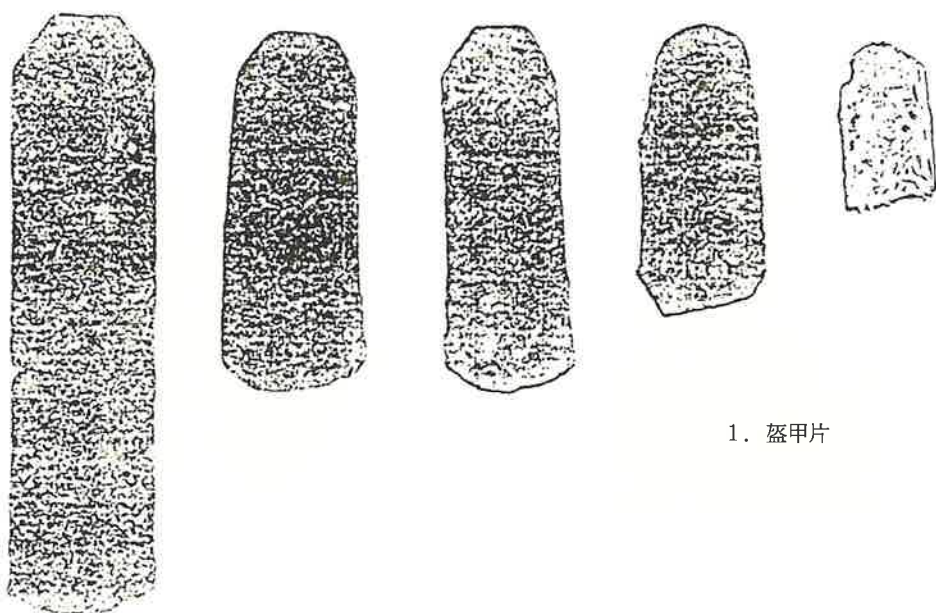
1. 頭盔の後面

絵図17. 出所；上京龍泉府遺址
①頭盔の後面



1. 盔甲片

絵図18. 出所；上京龍泉府遺址
①盔甲片



1. 盔甲片

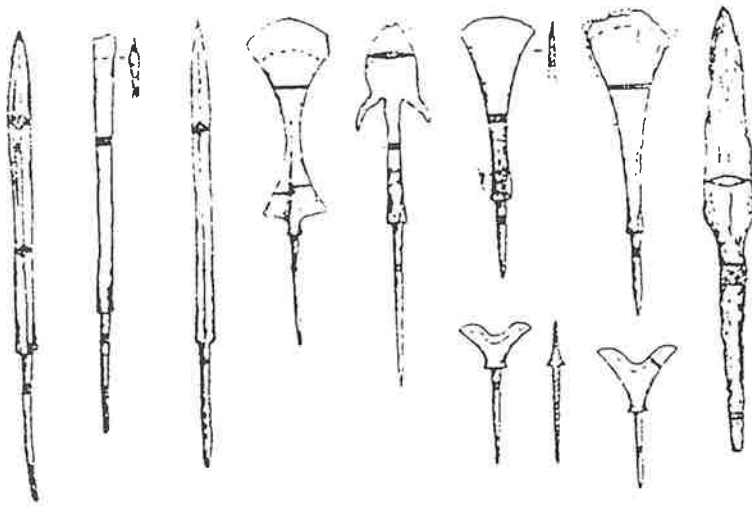
絵図19. 出所；上京龍泉府遺址
①盔甲片（長いもので12.3cm）



絵図21. 出所；渾江市党校遺址
①鉄刀片

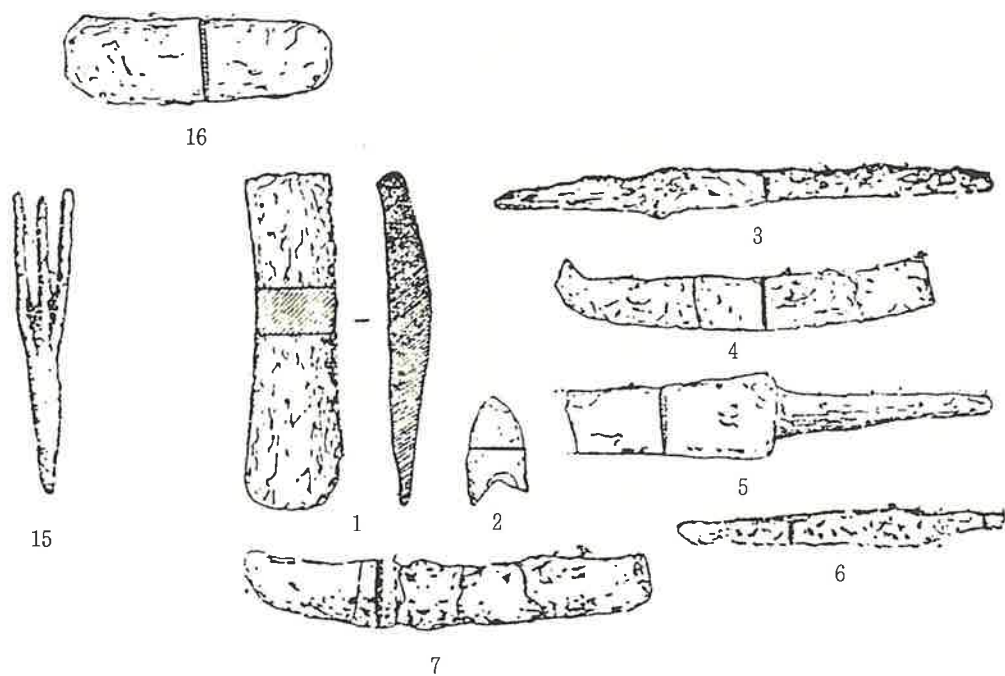
1. 鉄鏃

絵図20. 出所；六頂山
①鉄鏃



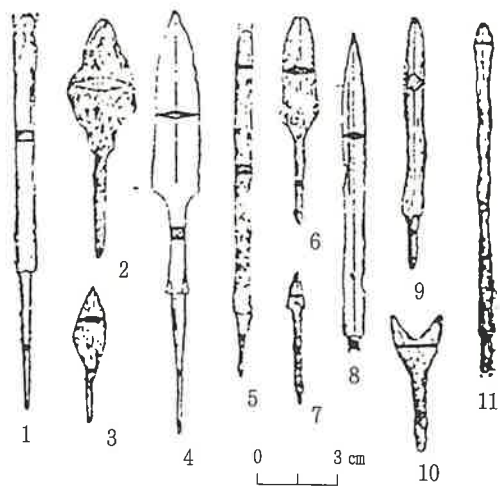
1. 鉄鏃

絵図22. 出所；臨江鎮遺址
①鉄鏃



繪圖23. 出所；永安遺址

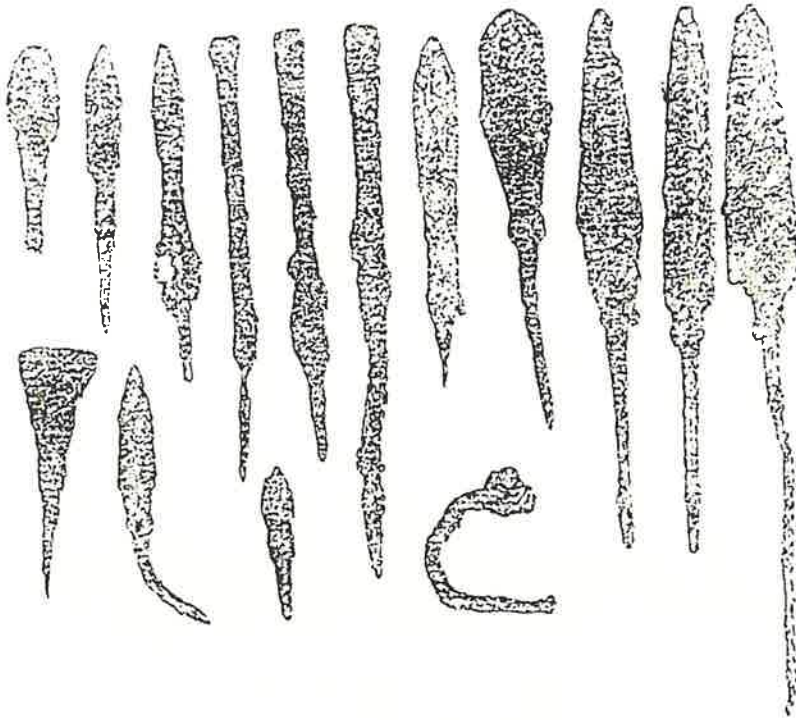
③～⑦鐵刀 ⑮鐵三齒器 ⑯盔甲片



1. 鐵鏟

繪圖24. 出所；永安遺址

①鐵鏟



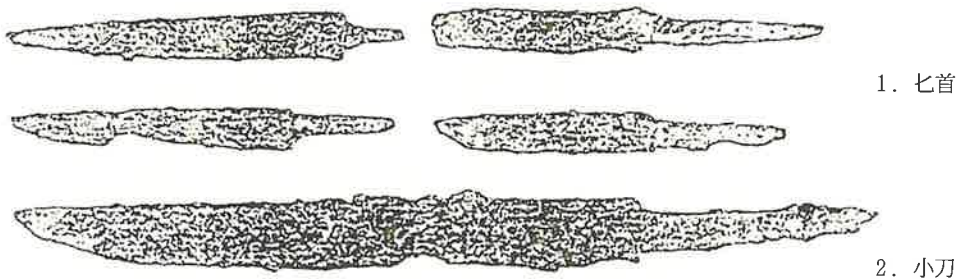
1. 鉄鏃

絵図25. 出所；青海城遺址
①鉄鏃

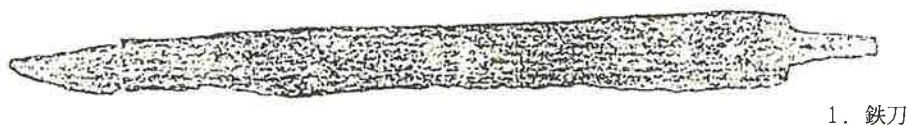


1. 鉄甲片

絵図26. 出所；青海城遺址
①鉄甲片（長いもので9.0cm）



絵図27. 出所；青海城遺址
①七首 ②小刀（小さいもので34.2cm）



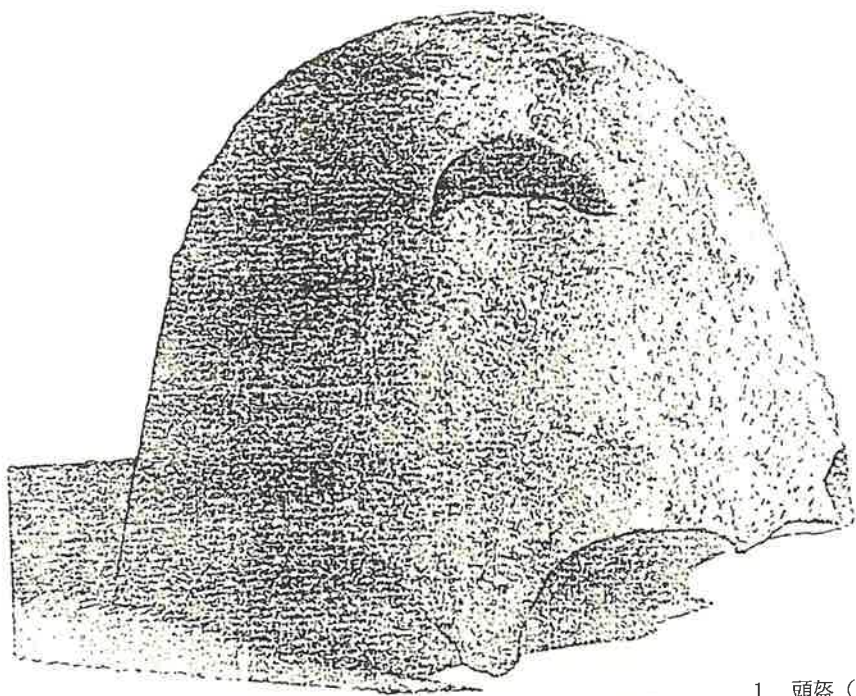
絵図28. 出所；咸鏡南道咸州郡
①鉄刀（長さ34.0cm）



絵図29. 出所；咸鏡南道咸興市会上区域徳山洞
①鉄刀（長さ32.0cm）



絵図30. 出所；青海城遺址
①矛刀 ②矛鏑



1. 頭盔（兜）

絵図31. 出所；梧梅里遺址
①頭盔（兜）（下部の直径21.2cm）

